

朝鮮半島はユーラシア大陸日本の脇腹に向けて突き付けて1本の鉈である。モンゴルシヤ、中国などユーラシアの国家は、朝鮮半島を経由せざることではできなかつた。敵対による朝鮮半島支配は日本に容し難いことであつた。日清戦争とば、清国に服属の軍事的保護下にあつた朝鮮国から切り離して、「独立自邦」とし、もつて日本の安全保障するための戦いであつた。戦争もその淵源をたゞれば、干涉といふ屈辱をのまされたを「特むに足らず」とみたが、南下政策を進めるロシアが、護下に入らんとした歴史的事行きつゝ。

日本は東西対立のプロントラインに位置づけられて塗炭の苦しみを嘗めさせられたにちがいない。

中国を踊らす北の「崩壊力ード」



拓殖大学学長

渡辺 利夫

事態を想定すれば、自制もやむを得ない状態なのである。だが、まさに苦々しいことに、この自制は近い将来、韓国を一層手ひどい屈辱に貶めさせる恐れがある。

はミサイルに搭載可能な核弾頭の小型化をめざし、それが成功する可能性は高いと専門家はいう。半島の軍事統制権をもつ米軍も、哨戒艦撃沈と延坪島砲撃を半島有事と捉えることはなかった。アフガニスタン、イラクに展開し

朝鮮は成り立たない。党代表者会議に先立つて金正恩氏をトップとする新指導体制をいち早く支持したのも中国ではなかつたか、といふ声が聞こえる。

そつだうか。中国をしてそのような対応に向けさせざるをえない理由が何かあると考えるのが筋ではないか。北朝鮮の崩壊を恐怖しているのは、誰あらう中国である。崩壊によつて朝鮮半島の全域が米韓の統治下に入ることは、中國には到底、受け入れ難い事態である。崩壊によつて大量に発生する難民の流出先は、国境沿いの朝鮮族自治区である。そこでの混乱が独立を求めるいくつかの少数民族族に与える影響は計り難い。

「北朝鮮は中国の恐怖を知悉し、「崩壊カード」で対中外交を操っている。中国が哨戒艦撃沈にも延坪島砲撃にも「微温的」な対応に終始した理由が、ここにある。中国が恐れるのは半島の現状維持であって、非核化ではない。中国は6カ国協議の議長国として半島の平和と安定のために「奔走」

しているかのように振る舞つただけである。西側への巧妙な「偽装」である。この間に西側は北朝鮮への譲歩を何度も余儀なくされ、何より核開発への時間的余裕を彼の国に与えてしまった。さればこそ、北朝鮮の瀬戸際政策は韓国はもとより日本や在日米軍基地をも含む究極的なものとなる危険性がある。日本はどうする。

南シナ海はみずから「核心的利益」の範囲内だと中国は主張し、さらに尖閣諸島への強硬策をもって東シナ海の海洋霸權掌握への意欲を漲らせてている。幸いにとにかく、中国のこの強硬策は後半期オバマ政権の関心事をより深いアジア関与へと引き寄せた。日本の安全保障の懸案、集団的自衛権行使容認の千載一遇である。

普天間飛行場の名護市辺野古沖への移設は、沖縄世論の反転によつて実現への道はもはや閉ざされてしまつた。集団的自衛権行使容認は、民主党政権の愚策によつて失われた日本への信頼を取りもどすための不可避の選択でもある。決断の秋である。